ああ、御在位六十年

――民族の生命の復活と蘇生――

偉大な悲劇

民族はその生存と存亡の危機に直面した時光を放つ。そしてその光とは民族の生命の復活と蘇生の光である。さらに言えば、その危機の度合が深ければ深いほどその光はなお一層輝きを増す。

それを日本史にみると、仏教伝来に始った上代の外来文化移入時の混乱時代、鎌倉時代から南北朝時代の中世混乱期、幕末近世から近代に至る明治維新の前後の混乱、昭和大敗戦による混乱、といずれも日本民族にとって大危機であった。だが、我民族はこれらの危機的状況の中

で常にその生命の復活と蘇生をくり返してきた。

中でも大東亜戦争の大敗戦のそれは、あまりにも悲惨であった。歴史上、未曽有の悲劇と受難の中で我民族はさまよい歩かなければならなかった。住むに家なく、着るに衣なく絶望と飢餓の中で最悪の状態が現実であった。民族の悲劇と慟哭の中で、何かこの民族の衰亡の兆候すら見えるようなそういう現実でもあった。

しかし、この日本の敗戦の意味をもっとも深いところで受けとめられ、もっとも御心を痛めつづけられ、深い御憂念と、御一念とを持ちつづけて下さった御方があった。その御一人者とは今上陛下であらせられたのだ。

この悲しみの絶頂ともいう日に、国民は歴史と民族の理想の光を見たのであった。平時でさえ、この国の全ての不幸を、国民ただ一人の不幸があってさえも、それをことごとく御一身に引き受けられ「責任は自分一人にある」と仰せられる天皇陛下にとって、

戦局必ズシモ好転セズ世界ノ大勢亦我ニ利アラズ加之敵ハ新ニ残虐ナル爆弾ヲ使用シテ頻ニ無辜ヲ殺生シ……尚交戦ヲ継続セムカ……億兆ノ赤子ヲ保シ皇祖皇宗の神霊ニ謝セムヤ是レ朕ガ帝国政府ヲシテ共同宣言ニ応セシムル所以ナリ……

帝国ト共ニ終始東亜ノ解放ニ協力セル諸同盟邦ニ対シ遺憾ノ意ヲ表セザルヲ得ズ……帝国臣民ニシテ戦陣ニ死シ職域ニ殉ジ非命ニタオレタル者及其ノ遺族ニ想ヲ致セバ五内為ニ裂ク且戦ヲ負ヒ災禍ヲ蒙リ家業ヲ失ヒタル者ノ厚生ニ至リテハ朕ノ深ク軫念スル所ナリ……堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ビ以テ万世の為ニ大平ヲ開カムト欲ス

と詔りなされたつらさはいかばかりであったか。ここに天皇陛下は、民族悲劇の先頭に御立ちになった。このことに国民は改めて深い感動と敬仰の念を持つと同時に、唯一の希望の光をみたのだった。御自身の命と引きかえに国民を滅亡から救わんと念じられたこの御心に感動したのであった。

ひとりの人間においても、苦しみ抜いた者がそれに耐え抜いた時、人間として大きく成長するように、民族においても苦しみに耐え絶望の中から一点の光を見つけ出し、立ち上った民族、それは偉大な民族である。その意味から、偉大な民族は偉大な悲劇を持つ。民族の歴史もひとりの人生と同じなのだ。

我々が、歴史の中から学ばなければならないのは、こうした悲劇の絶頂の中で、民族の大義

を守り、信じることに殉ぜんと万感の思いを秘めながら最後を遂げた人びとや、受難の中で耐え、涙を流しながら、復活と蘇生を念じた人びとの祈りと苦労を思い、感謝の誠をつくすことでなければならない。

敗戦下の茫然自失の国民を何とか助けよう、悲しみと苦しみを少しでも和らげようと陛下は御軫念なされつづけ御心を砕かれた。国民はその御心によって励まされ、助けられた。生きていく魂のよりどころを示していただいたのであった。それによって我民族は復活し、蘇生したのだ。今日、我々は天皇陛下がその時何を念じていられたのか、何をお祈りなされたのかをよく考え、これからの我民族の真の生き方をはっきりと確認しなければならない。

天皇陛下の御在位六十年とは、そのことをお祝い申し上げるのみであってはならない。六十年にわたる永い間、ただ国がらを守らんと念じられた御心と、民安かれと念じられた御心に対し奉り、国民は御報謝と御詫び申し上げるものでなければならないのだ。

陛下の御一念と、国民の心がひとつに結ばれた時、それは日本が日本であり、我民族が持ちつづけていた民族の理想なのである。この天皇陛下の御心を我々は大御心と拝するものである。大御心、すなわち天皇思想とでもいう天皇の御本質は、有史以来、御歴代天皇陛下の伝統的な

御信仰であり御心であった。陛下の御在位六十年をことほぐ我々は、今こそ三千年の貴重な民族の伝統を深く受けとめなければならないのである。天皇陛下を中心にして日本民族は復活し、蘇生した。陛下と共にある国民ある限り民族の生命は光り輝き、日本は永遠である。

法隆寺玉虫厨子の意味

歴史に登場する人びとは、誰もがそうであるが必ず一念をいだいて倒れた人びとである。人は倒れてもその人の一念は滅ばない。その滅ばない一念とは何であったのかを思い出すのが歴史であろうか。後の世の人々は、それを受継ぐことでなければならないのだ。では、御歴代の天皇の御一念とは何であったのか。天皇の御本質とは何であったのか。我々はその御一念が何であったのかを感じ、感謝と敬仰の念を持っとき、歴史は生きたものとなる。日本人として身についた生命となる。

御歴代の天皇は、常に民族の先頭に御立ちになり、御身を顧りみられず国民を思われ、ただ国土安泰を祈念された。日本の歴史とは天皇御悲願の歴史でもあった。

そういう天皇の御本質を皇太子のままで薨去なされ、御位にお即きになられることはなかった聖徳太子の御生涯の中からその御祈念と御精神を拝してみたい。太子は、いうまでもなく用明天皇の第二皇子としてお生れになり、推古天皇の摂政として当時の政治を整備なされた。十七条憲法を制定され「三経義疏」をお著わしになったことも人の知る通りである。さらに、大和斑鳩には法隆寺を建立され、推古天皇と共に深く仏教信仰に帰依なされたのであった。その太子が摂政をお務めなされた前後三十年間、すなわち外来文化の移入時期から大化改新に到る約百年の間は、文明興隆と同時に歴史はまざまざと混乱と危機の内に展開した時代であった。中でも氏族の血肉同士の対立と、大氏族をして驕慢ならしめ私権拡大の野心は目に余った。さらには、それまでにはなかった外来の悪疫が発生流行し、社会状態も混乱を極め、多くの人びとが苦しんだのであった。そういう時代に太子は、

和を以て貴しと為し、私を背いて公に向ふは、是臣之道なり、

と、十七条憲法で詔りされたのであった。

また、伊予の国道後温泉郡には、法隆寺の庄があった。ある若き日の太子はこの道後温泉を訪ねられ、ここでお作りになられた漢詩があるが、かつて「伊予湯岡碑」とよばれ、太子御建

立の碑が道後温泉にあったという。今は幻の碑となっているが、その碑文は全て、「続日本紀」に記されて現存している。それによれば、

惟ふに、天れ日月は上に照りて私せず、神井は下に出て給へざるなし。万機はこの所以に妙応し、百性はこの所以に潜扉す。若ち、照らし、給へて、偏私することなきは、何ぞ寿国に異らむ云云、

とお読みになった。天に日月があまねく照り輝くように、地に神井戸が波々と湧き出て尽きることがないよう政治もこのように全ての国民に対して、わけへだてもなく公平に行われたならば、そこは理想国（寿国）であると仰せられた。

太子は、少年期にこの時代の文明興隆と同時に押し寄せるさまざまな混乱とそれによる民族の危機を目の前にされた。人間が人間であるための悲劇と、時代の危機の中で御心を傷めつづけられていたのである。そういう現実の中から「十七条憲法」や「伊予湯岡碑」にあるように、この国をして寿国なれ、と御祈念なされつづけたのであった。この太子の御心とは寿国、すなわち理想国家実現への御一念であり、その深い御祈念に対して当時の人々は思慕と敬仰の心を抱いていたのであった。

法隆寺は、いうまでもなく聖徳太子の御建立の寺である。この法隆時はこの時代の太子の御

体験とどのような関わりを持つのであろうか。一体どのような思いを込められて御建立なされ、何を祈られ、いかなる仏に、いかなる誓願をなされようとされたのであったか。

法隆寺の大宝蔵には有名な玉虫の厨子がある。法隆寺に伝わる飛鳥時代の厨子で玉虫の厨子というのは、宮殿の金具の下に玉虫の羽根を伏せて装飾してあるからで、扉と須弥座の四面に釈迦の仏世界が絵物語風に描かれている。ここに描かれている釈迦の仏世界の絵とは、「捨身飼虎」の図なのだ。

昔インドの薩埵太子が馬で山野を駆けめぐっている時、飢えた虎が七匹の小虎を連れて竹林をさまよっているのに出合った。薩埵太子は飢えた虎親子を憐れに思い、わが身を虎に与えるべく、竹でのどを刺した。血を見れば虎は襲いかかるはずなのに飢えのひどさのために襲う力さえなく、太子を食べようとしなかった。そこで太子は、崖に上って上衣を脱ぎ、崖から飛び隆り、地上に墜落した自分の肉を虎に食べさせた。

という仏世界の慈悲深い物語りであるが、この菩薩行を絵に描いたのが「捨身飼虎」の図である。釈迦生前の数ある菩薩行譚の中から捨身を主題とする「捨身飼虎」図が法隆寺の玉虫の厨子に描かれている意味を見逃してはならない。この絵の意味するものが重要なのだ。この厨子

は法隆寺伝によれば「推古天皇ノ御物ナリ」とある。推古天皇は、仏法興隆の詔りをなされ、三宝興隆を国是とされた最初の天皇であらせられた。聖徳太子は推古天皇の皇太子で摂政であらせられたのだ。太子の少年の日、御自身の内面では父用明天皇と死別され、さらに用明帝皇后の母とも生別れされた。又、外面的には先に述べたが文明興隆と同時に社会状態も混乱を極めた時代に太子が最も心に留められたことが捨身の菩薩行であったのだ。太子の御心は、釈迦その人の捨身の菩薩行に倣おうとなされ、御信仰と仏法に対する帰依であった。

太子の御一生とは、捨身飼虎さながらの、万民の命に代えて、我が身を捨てる御決意の御生涯であらせられた。太子の薨去は、推古天皇三十年であったが、推古帝は少年時代から甥である太子を見守り何よりも御自分の頼みとして摂政として政治を託され、この時代を共に歩まれたことに対して、太子の形見の玉虫の厨子の持念仏となされ、ありし日の聖徳太子の捨身の心をしのばれたのではなかったろうか。人びとの太子薨去による悲痛の思いは、「日本書紀」の記録によって充分うかがえる。すなわち、

日月輝を失ひて、天地既に崩れめべし、今より以後、誰か恃まむ哉

多くの人びとは、今より後に誰にたのみ、すがればいいのかと嘆き悲しんだのであった。太子

の法隆寺御建立の御一念は、父帝であらせられる用明天皇への御祈念と同時に、一切の門閥専権を排し、人心の和と、国土安泰の御祈念であった。寿国の実現を本願なされ、捨身という最も尊い御心は皇室と天皇の御本質であり、至高の大御心として日本史の中で光り輝くのである。

山背大兄王の哀しみ

刃による力よりも御祈念によって、策略よりもまごころによって和を願われたところに聖徳太子の御信仰はあったはずであった。だが、太子の御祈念も空しく、太子薨後も氏族間の血肉の争いはつづいた。蘇我家は、稲目以来、馬子、蝦夷、入鹿と四代にわたって大氏族として皇室と政治に深いかかわりを持った。しかし、時代が移るにしたがい、その専制横暴ぶりが次第に増長した。日本書紀の「誰か恃まむ哉」という国民の声からもうかがえるように蘇我家の驕慢、専制は慢性的であった。聖徳太子御生前、人びとは太子の御威徳のみがわずかに蘇我家の専制振りを抑えていたことをよく知っていた。だから、太子の薨後は太子の御長子であらせられた山背大兄王に人心は動いていったのである。山背大兄王は、太子の御遺訓をよく守ら

れ、権威をもって蘇我家を見守っていなさったのである。すなわち、政治的に何の野心を現わされない大兄王の政治的なものを超えた道徳的なシンボルになられたのであろうか。蘇我家はそのことに最も脅威を感じたのである。さらには、蘇我家はこの大兄王の御態度を恨みに思っていたのであった。そういう時期の皇極天皇二年、蘇我入鹿は山背大兄王の上宮御一族を斑鳩に襲撃したのである。大兄王御一族は、この襲撃に対して予想はしていても準備は何もなさっていなかった。このような内乱、争いの拡大することによって国民に影響をおよぼすことを深く憂えられたからである。大兄王は一族とともに斑鳩から生駒山に逃げられた。大兄王一族と行動をともにした従者の三輪文屋は、

請ふ深草屯倉に移向きて、東国に詣りて乳部を以って本を為し、師を興して還り戦はむ、その勝たむこと必なし

と大兄王に進言したと日本書紀は伝えている。すなわち、全国には多くの法隆寺の庄があり、東国に行き、乳部の民を中心に挙兵したならば入鹿と戦って必ず勝てますと進言した。確かに上宮家の威徳の力からすれば、あるいは入鹿を反撃できたであろうことは想像できる。だが、山背大兄王は、この切なる勧めを退けられた。日本書紀は、

卿がいふ所の如くば、其の勝たむこと然らむ。但だ吾が冀はくは、十年百姓を役はず、一身の故を以て、豈に万民を煩なし労らしめむや、又後世に於いて、民の吾が故に由りて己が父母を喪せりと言はむことを欲せじ。豈其れ戦ひ勝ちて後に、方に丈夫と言はむ哉。夫れ身を捨て国を固くせむは、亦丈夫にあらずや

と仰せられたと伝えている。何という御決意であろうか。「一身の故を以て」と万感の思いを込め仰せられた。蘇我の行動がどのようにひどいものであっても、これと戦うことは「一身の故」すなわち、私争の内乱であるとお考えになった。この万民への御配慮こそ、御父聖徳太子の御精神であり、また御歴代の天皇の御心であった。生駒山中の数日の間、熟慮の末この重大な御決意、すなわち一族自決の御覚悟を明らかにされたのであった。かくて一族は下山され法隆寺に入られた。蘇我入鹿の軍勢は寺を囲んだ。大兄王は、入鹿配下の軍将たちに最後の御言葉として、

吾れ兵を起して入鹿を討たば、其の勝たむこと定之。然るに一身の故に由りて、百姓を傷け残はむこと欲せじ、是を以って、吾が一身をば入鹿に賜ふ。

と仰せられたと日本書紀は伝える。

勝てる自信はあるが、戦乱になって一番苦しむのは農民であり国民である。自分は、その農民が苦しむことに耐えられない。したがって自分が入鹿に討たれることによって内乱がなくなるのなら入鹿に討たれようと仰せられた。最後まで万民に対する大兄王の御心と御心境は変らなかった。このことは読む者の心を揺がせる。

耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍んで御一族は全員が自決なされたのであった。山背大兄王家はここに全滅した。山背大兄王の捨身は、信ずるところに殉ぜられた殉教者のそれであろうか。

日本書紀にはさまざまな死が記されているが中でも、もっとも心を打たれるのがこの山背大兄王家の死であろう。この平和精神から一戦も交えられることなく入鹿に御身を与えられた非業の死は、法隆寺玉虫厨子の「捨身飼虎」の図の意味に通じている。大兄王はやはり聖徳太子の御子であらせられた。御父太子の御遺訓を守らんと一身に代えて皇室の伝統を守るため非業の死を遂げられたのである。

この山背大兄王御一族の最期の無償性こそは、聖徳太子の御信仰を実証される捨身の菩薩行であった。この捨身の菩薩行とは、仏教が伝わる以前から、我が国の伝統的な道義として、自

然の現われとして古くから民族が大切に伝えてきたことでもあった。山背大兄王上宮家全滅の二年後、大化の改新が行われ、ここに民族の危機ははさけられたである。

我々が歴史を学ぶとは、これまでに伝えられてきて今あること、その伝統の理法の現われを調べることでもなければならないのだ。

大兄王家全滅の二年後に聖徳太子が理想としてかかげられていた大化の改新が断行され、日本の再編成が成功した。聖徳太子の御一念と山背大兄王の御一念をして、民族の生命は復活と蘇生したのであった。我々はここで大兄王が身を以って示された哀しみを知らなければならない。それを示さなければならなかったこの時代のこの日の哀れさを知る努力をしなければならないのである。万民の命と引き代えに御身を敵に与えられた山背大兄王の大御心は、御歴代の天皇と皇室の理法の現われであり、民族の美と信仰として拝するものである。博大なる大御心は天皇と皇室の真の御姿であり、天皇の御本質である。この天皇が国民におとりつづけられた御姿に対し、国民は敬仰しつづけた。これが日本民族の歴史であった。

五内為ニ裂ク

日本民族は、民族の伝統としてもっとも誠実に生きる道義というものに最高の価値を求めた。その民族の良心の鑑として御歴代の天皇と皇室は、天皇、皇室でなければ成し得ることのできない貴重な伝統を堅守なされつづけた。それは不断に民安かれ、国安かれとの御一念と、御一身をひたすらに国民のために捧げつづけられたことであったため、我々日本民族は、その誠実な道義というものに最高の価値を見い出し、天皇と皇室に対して限りない敬仰しつづけたのであった。

社頭寒梅（昭和二十年）

風さむきしもよの月に世を祈るひろまへ清くうめかをるなり

これは昭和二十年、すなわち敗戦の年の陛下の御歌である。この御歌をお詠みになった陛下の御心はどのようなものであったのか。この大御歌を拝する時、我々は、この一言一句からおそらくこれ以上はないであろうほどの悲痛な旋律を聞く思いがする。「寒梅」「寒風」「霜夜」「月」「ひろま」の一字一句には、群る苦痛がそのまま凍りつくような、寒々としたそこは見渡すか

ぎりの荒涼とした世界をみるのである。

亀井勝一郎は、この大御歌を拝して次のように言った。

これが国の生死を賭した戦乱の過中の御歌だということが私を驚かせた。寒風の吹く霜夜の月に、御ひとり目ざめ給うて、ただ祈るより他になき悲哀の極みを垣間見申しあげたような気がする。陛下は孤独であらせられる。暗黒の中に、わずかに白く浮いて咲く一輪の梅花に、陛下は希望とはいいかねる希望を託しておられた。

戦局の破綻による敗戦への道のりを歩む日本であった。その敗戦へ向う速度はだんだんと速くなる。陛下は昭和悲劇の絶頂への足音をお聞きになったであろうか。おそらく御心痛のあまり、夜もお休みになられない日々であったに違いない。これほど御心を痛めつづけられても陛下の御立場は、ただお祈りされるより他になすすべもなく、一すじにお祈りなされ御軫念なされ、お苦しみなされつづけたのであった。

「世を祈る」、この一句には陛下の万感の御祈念がこもっている。これだけが陛下にとって全てであらせられた。さらにその御祈念とは、

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかにならむとも

身はいかになるともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

国がらをただ守らんといばら道すすみゆくともいくさとめけり

という御歌のように国民をお護り下さるため「身はいかにならむとも」という捨身の御覚悟と「いばら道をすすみゆく」との御決意なのであった。

昭和二十年一月、米軍ルソン島上陸、三月、東京大空襲、硫黄島全滅、六月沖縄守備軍全滅、八月六日つづいて九日、広島、長崎の原爆投下、ソ連対日参戦と続き、ついにはポツダム宣言を受諾し、陛下は終戦の詔りをなされることになる。明治天皇以来、「君臨すれど統治せず」と、あれほど律儀に立憲君主の政体に影響を及ぼしはしないかと御政務向きに批判をなされたり、意見を表にお表わしにならず憲法に忠実であらせられた陛下が万感の極に至る御一念で超非常の御聖断を下されたのである。

「本土決戦か、あるいは、ポツダム宣言の受諾による降伏か」という決断の時、昭和二十年八月十日、時刻は正午近く、陛下の御前での最高戦争指導会議で意見がわかれ、ついに鈴木貫太郎内閣総理大臣は「意見の一致をみませぬので、ここで陛下の御聖断を仰ぎます」と陛下に御伺いした。陛下は静かにお立ちになった。

御　諚

外に別段意見の発言がなければ私の考えを述べる。反対論の意見はそれぞれよく聞いたが、私の考えはこの前申したことに変わりはない。私は世界の現状と国内の事情とを充分検討した結果、これ以上戦争を続けることは無理だと考える。国体問題についていろいろ疑義があるとのことであるが、私はこの回答文の文意を通じて、先方は相当好意を持っているものと解釈する。先方の態度に一抹の不安があるというのは一応もっともだが、私はそう疑いたくない。要は我が国民全体の信念と覚悟の問題であると思うからこの際先方の申し入れを受諾してよろしいと考える。どうか皆もそう考えて貰いたい。さらに陸海軍の将兵にとって武装の解除なり保障占領というようなことはまことに堪え難いことで、その心持ちは私にはよくわかる。しかし自分はいかになろうとも、万民の生命を助けたい。この上戦争を続けては結局我が邦がまったく焦土となり、万民にこれ以上苦悩をなめさせることは私にとってじつに忍び難い。祖宗の霊にお応えできない。和平の手段によるとしても、素より先方のやり方に全幅の信頼を措き難いのは当然であるが、日本が全く無くなるという結果にくらべて、少しでも

種子が残りさえすればさらにまた復興という光明も考えられる。私は明治大帝が涙をのんで思いきられた三国干渉当時の御苦衷の忍び難きを忍び、一致協力将来の回復に立ち直りたいと思う。今日まで戦場に在って陣歿し、あるいは殉職して非命にたおれた者、またその遺族を思うときは非嘆に堪えぬ次第である。また戦傷を負い戦災をこうむり、家業を失いたる者の生活に至りては私の深く心配する所である。この際私としてなすべきことがあれば何でもいとわない。国民に呼びかけることがよければ私はいつでもマイクの前にも立つ。一般国民には今まで何も知らせずにいたのであるから、突然この決定を聞く場合動揺もはなはだしかろう。陸海軍将兵にはさらに動揺も大きいであろう。この気持をなだめることは相当困難なことであろうが、どうか私の心持ちをよく理解して陸海大臣はともに努力し、よく治まるようにして貰いたい。必要あらば自分が親しく説き諭してもかまわない。この際詔書を出す必要もあろうから政府はさっそくその起案をしてもらいたい。以上は私の考えである。

長い引用であるがこの御諚はこの日の御前会議に列席した下村宏国務大臣内閣情報局総裁が書き写したものである。さらに下村総裁はこの御前会議の様子をその著『終戦秘史』の中で

次の様に述べている。

御諚を承っているうちに頭は次第に下っておもてを上げる者もいない。忍び泣く声がここにかしこに聞えてくる。御ことばのふしぶしに胸を打たれる。たとえ我が一身はいかにあろうとも、国は焦土と化し、国民を戦火に失い、何として祖宗の霊にこたえんやという御心を拝して涕泣の声は次第に高まってくる。さらに為すべきことはいとはない。マイクの前に立ってもよいと仰せらるるに至り、忍び声も止めもあえず声をあげた。ここにもそこにもせき上げしゃくり上げる声が次第に高くなる。陛下の白い手袋の指はしばしば眼鏡を拭われ、ほおをなでられたが、私たちはとても正視するに堪えない。涙に眼鏡もくもってしまった。御諚が終りて満室ただすすり泣くばかりである。しゃくり上げる声ばかりである。

と、この歴史的な御前会議の情況をつぶさに報告している。この項も長い引用であるが、我が民族の歴史の中で最も重要なところなので、そのまま引用させていただいたが説明の必要はないであろう。ただ、陛下が民族悲劇の先頭にお立ちになり、国民を滅亡の危機から救わんとの御心からでた陛下の御言葉がいかに強く御前会議に列席した人々の心をうったのかがしのばれ

る。

こうして大東亜戦争は終りを告げることとなり、こうして日本は救われたのだった。このことに陛下もお泣きになった。国民も号泣した。これが昭和史が涙によって書かれた日なのである。陛下は終戦の詔りで戦死した者、又その遺族のことを思う時、「五内為ニ裂ク」と仰けられたが、この一語は葦津珍彦氏のいうように「死よりも遥かにまさる苦しみを意味する。それは、地獄の業火のなかに立って、なお死ぬことのできないほどの極限の苦しみ」なのであった。それほどの苦しみのなかで陛下は御聖断を下されたのであった。多くの国民は、強い衝撃を受けたが、この陛下の御気持をよく理解し、その意味の深さに慟哭したのであった。それゆえに屈辱的な敗戦にもかかわらず大きな混乱もなく平穏に終戦することができたのである。

日本が滅びるかもしれない。そういう時に天皇陛下は神であらせられた。それは神でなくしては成り得ないであろう御自分の御身と引き替えに国民を救われたのである。平和主義に徹せられた陛下は当然この戦争には反対であらせられた。この陛下の意に反した開戦であったが、立憲君主として憲法に忠実であらせられ、責任ある機関で決定したことであるから止むを得ず開戦を裁可されたのであった。このことは昭和史の研究の進んだ今日では誰もが知る通りであ

る。それにもかかわらず、陛下は万民の命に代えて御身を捨てる御決意であった。さらにはこの敗戦の責任を御一人でうけて立とうとなされたのである。何というありがたいことであろうか。我が民族の歴史ある限り、この「昭和の偉大なる敗北」の日は民族の生命の輝きとして忘れられることはないであろう。

名誉を思わず、利益を思わず

日本民族にとって未曽有の大危機の中で、天皇陛下の民族を救わんとなされた御祈念と超非常の御処置によって終戦を迎えることができた日本であった。が、昭和悲劇の絶頂はまだこれからでもあった。日本はこれからどうなるのか。敗戦降伏という無念さに加え、さらには絶望と飢餓の中で国民は茫然自失の毎日であった。その不安と絶望感の漂うときに、連合軍は占領軍としていよいよ上陸してきた。八月三十日にはマッカーサー元帥が、日本の占領管理の責任者として入り込んできた。九月二日、アメリカ軍の旗艦ミズリー号で降伏調印式が行われ、名実ともに日本は有史以来はじめて異民族による支配を受けることとなったのである。

陛下と占領軍総司令長官マッカーサー元帥との会見は、占領軍側の発案で行われることとなり、陛下は九月二十七日アメリカ大使館へ御訪問になり、元帥と会見された。このマッカーサー元帥との御会見の模様は一般によく知られているところであるが、昭和の歴史ある限り、いや我が民族の歴史ある限り語られなければならない場面なのでここでもとりあげる。マッカーサー元帥はその自著の「マッカーサー回想録」でも述べているが、陛下との会見では、驚き、かつ感激したのであった。それは、これまでの世界史に登場する多くの敗戦国の元首が戦勝国の将軍に会見したが、その時の敗戦国元首は必ず自分の生命と財産の保障を嘆願するのだった。マッカーサー元帥は、陛下も命請いにおいでになったと考えていたのである。ところが、陛下はマッカーサー元帥に、

戦争遂行の責任は全て私にある。文武百官は私の命ずるところであるから彼等には責任はない。私の一身はどうなろうともかまわない。この上はどうか国民の生活が苦しいので助けてほしい……

と、おっしゃったと『待従長の回想』の中で藤田尚徳待従長は述べている。又、その後昭和三十年、重光葵外務大臣がニューヨークでマッカーサー元帥と会見した際、元帥本人が、

天皇陛下の方から最初に戦争の責任について話した。本当に驚いたが次のように天皇は言明した。「自分は今度の戦争に伴う全事件について完全な責任をとる。全軍の司令官や政治家のやった全ての行動の責任は自分にある。自分の一身は、元帥がどうなさってもかまわない。元帥の判断通り進んでほしい。自分が全ての責任者であるから」といわれた。もしも国の罪をあがなうことができれば進んで絞首台に上ることを申し出るというこの日本の元首に対する占領軍司令官としての私の尊敬の念はその後も高まるばかりであった。

と語ったと重光外務大臣も昭和三十年九月十四日付『読売新聞』紙上で述べている。我民族はこのようにして、終戦の御聖断によって救われ、さらには陛下の捨身の大御心によって戦勝国の援助を受け、助けられたのであった。

陛下が終戦で詔りされたことは比喩ではなかった。一語一句がそのままに具体的であった。「自分はいかになろうとも万民の生命を助けたい」と詔りされた通りを、マッカーサー元帥におっしゃり、元帥もその陛下の立派な御態度に感服したのであった。

世界史の近代から現代とは、君主制崩壊の歴史であった。この間、世界中で大小様々な戦争

があったが、その戦争が終れば敗戦国から必ず王朝が消えた。いや、戦勝国からも消える運命のところは多かった。戦争が終り、新しい秩序が生れたとき、君主制と王朝は打撃を受け、中でも敗戦国のそれは決定的であったのだ。しかし、日本の敗戦だけは例外であった。多くの国民は天皇陛下と運命を共にしようとしたのである。戦争に敗れてもなお、尊皇の伝統は生きつづけたのであった。

皇居内の勤労奉仕者（昭和二十年）

戦にやぶれし後の今もなほ民のよりきてここに草とる
をちこちの民のまゐ来てうれしくぞ宮居のうちに今日もまたあふ

戦災は皇居も受けた。戦後間もなくの皇居周辺も全国の都市と同じように荒廃に帰したのである。皇居内でも木造の建物は焼失し、雑草が生い繁り、瓦や焼け残り材が散乱し痛ましい情況であった。このことを知った人びとが皇居の清掃奉仕を願い出たのである。この二首の御歌はこの勤労奉仕の人びとについて詠まれたものである。この清掃奉仕を願い出た一人である長谷川峻氏はその『みくに奉仕団報告記』の中で、

荒れ果てたのは皇居だけでなく、人心の動揺も否めない時であった。武器で敗れた日本

が、思想でさえも人間の精神でさえも敗れたのではないかという気がする。そういう時に「外苑の草を刈らせてほしい」と東北の青年たちが願い出たのであった。自分はこの純情な青年たちの燃えあがった気持を知って哭けた。これが命令されざる深胸の叫びなのである。六十人の若者は、自分たちで作った米、木炭、みそ、野菜を持って上京し戦後最初の十二月八日早朝、坂下門から宮城に入ったのであった。青年たちはモッコをかつぎ、瓦礫をかたづけ土山を崩し、清掃に当ったのである。ふと仰げば天皇が御会釈を賜っておられるのだ。予期せぬ田夫人、青年たち……。何の理屈もしらず、国破れて時に感じては花に涙をそそぐの情から物言いたげな風情である。敗戦にあえぐ国民と、祖宗に対し、国民に対して身を切るような思いをしておられる天皇が素裸な愛情を出して進まれるとき日本は再建されると信じた。陛下の御下問のあと、お帰りになる時、思わず国歌の奉唱をして奉送申し上げたのである。廃墟の宮城に至尊を拝して涙ぼうだと流しながら君が代を唱う敗戦国農村青年があったのである。ああ、君民一体とはこのことである。

何と美しい光景であろうか。また「陛下は泣き声の君が代を不動の姿勢で聞いておられた、終

りまで——。」と読売新聞社の『昭和史の天皇』にものっている。この美しく力のこもった哀しさが民族の再建の生命であった。この『みくに奉仕団』を第一回として、皇居清掃の勤労奉仕の申し出は今日まで黙々とつづいているのである。この勤労奉仕に参加した人びとは今日ではすでに百何十万人に及ぶという。今なお、申し込みは殺到し、申し込み後一年待たなければ奉仕できないほどという。

毎年、春と秋に陛下が御招待になる園遊会が開催されることは報道され、多くの国民が知っている。だが、この園遊会が催される御苑の清掃整備作業の大部分は、皇居清掃勤労奉仕に参加した人びとによってなされたことを人びとは知っているであろうか。このことは一度も報道されたことはない。が、陛下はこのことをよく御承知なのである。誰に知られなくてもいい。ただ名誉を思わず、利益を思わず、勤労奉仕の人びとと陛下は心の絆で結ばれているのである。陛下は『終戦の詔書』の中で「常ニ爾臣民ト共ニ在リ」と仰せられた。国民と共にあらせられた陛下に対して、我国民も陛下と共にありたいと念じたのであった。皇居清掃奉仕という尊い姿を通して天皇と国民が思い合い、国の再建を確認し合う姿は、何と美しく尊いことであろうか。これこそ我が民族の生命なのである。

鎮魂の旅

殉じる覚悟と決意によってのみ歴史の生命は甦る。民族の生命は存亡の危機に直面した時、光を放つとは先に述べた通りである。天皇陛下の御覚悟と御決意によって、国民の勇気と祖国と共に滅びる決意とによって民族の生命は蘇生したのである。我が国は今日、世界のどこの国よりも豊かになり、平和を享受しつづけている。あの敗戦の日から今日までの四十年間、誰がこの国の今日の平和と繁栄を想像したであろうか。敗戦国として日本各地は、戦災と窮乏の中で国民は混乱と飢餓に苦しんだ。

だが、破れた国の山河と共に、親や子や友人と共に、そして又、天皇陛下と共に喜びと悲しみを分ち合いながら、祖国の再建に邁進した日本であった。その祖国再建の第一歩とは二十年八月十五日の詔りであった。それは「死ね」と仰せられた方がよほどたやすいにもかかわらず、「絶対に生きよ」と仰せられたのであった。だが、こうして敗戦は終ったが、敗戦の混乱は深刻化し、内地や外地でまだ安否のわからない人、肉親を失った人、国民にとって悲しいつらい日々であった。そういう日に天皇陛下は、

この戦争によって祖先からの領土を失い、国民の多くの生命を失い大変な災厄をうけた。この際私は、私としてはどうすればいいのかを考え、退位も考えた。しかしよく考えた末、この際は全国を隈なく歩いて国民を慰め、励まし、また復興のために立ちあがらせるための勇気を与えることが自分の責任と思う。

と仰せられ、全国巡幸の旅に立たれたのである。

戦災地視察三首

戦のわざわひうけし国民を思ふ心にいでたちてきぬ

わざわひをわすれてわれを出むかふる民の心をうれしぞと思ふ

国をこすもとゐとみえてなりはひにいそしむ民の姿たのもし

陛下は昭和二十一年二月十九日、地方巡幸に出られた。横浜から始った巡幸は、北海道行幸まで三万三千キロ、延日数百六十五日間の長旅であった。陛下は終戦の御聖断の際の御言葉に

今日まで戦場に在って陣殉し、あるいは殉職して非命にたおれた者、又その遺族を思う時は悲嘆に堪えぬ次第である。また戦傷を負い戦災をこうむり、家業を失いたる者の生活に至りては私の深く心配する所である。この際私としてなすべきことがあれば何でも

いとわない……

と仰せられた。この「なすべきことがあれば何でもいとわない」の御言葉通り、御実行になったのであった。敗戦下の茫然自失の国民を何とか助けよう、悲しみを少しでも和らげようと御軫念なさる陛下にとっては、身を切られるような日々にじっとしておられない御気持から、巡幸となったのであろうか。その行幸の先々で陛下を待っていたのは、親を亡した子供、夫や子供が戦死した妻や親であった。又、家を焼かれ戦火で負傷した人びとであった。そういう巡幸の先々で陛下は国民にお声をかけられ励まされたのであった。

御歌で「国民をおもふ心にいでたちてきぬ」と詠まれたが、その陛下の御心に国民は深い思いを感じ、巡幸の先々で感動の渦ができたのであった。国民は陛下を感動と涙でお迎えし、「敗戦の苦しみはつらいが、日本には陛下がおいでになる」との認識を新たにし、新生日本の再建の決意を確かにするのであった。この巡幸が、民族存亡の危機を救い民族の生命の復活と蘇生をなし得た。御心によって励まされ、生きていく魂のよりどころを示していただいたのであった。そしてそのことが、今日の奇跡的な復興と繁栄の原動力となっているのである。

広島（昭和二十二年）

ああ広島平和の鐘も鳴りはじめたちなほる見えてうれしかりけり

陛下が広島を巡幸されたのは昭和二十二年の十二月五日から八日までであった。この御歌は、陛下が爆心直下の相生橋を御通過の折、橋の南の平和の塔から陛下のお通りを報ずる平和の鐘が鳴らされたが、その折に陛下が復興する広島についての御感慨を詠まれたものであろう。この「ああ広島」の一語に注目しなければならない。何ともいえない陛下の万感の思いが込められているようである。陛下は終戦の詔りで

新ニ残虐ナル爆弾ヲ使用シテ頻ニ無辜ヲ殺傷シ惨害ノ及フ所……

と仰せられたが、この広島の原爆で倒れた人びと、幸いにも生きのびたが負傷したり、家を焼かれた人びとに対して陛下は特別の感慨を抱かれたのである。中でも原爆孤児には特にいとおしく見舞われた。「広島戦災児育成所」を御訪問になった時である。原爆で親を失い、負傷の傷跡の残るけなげな幼児たち、少年たちの姿に陛下は泣かれた。そこにいた人びとも皆泣いたのであった。「ああ広島」にはこのような陛下の万感の思いが込められていたのであった。

昭和五十年十月、陛下は御在位五十年をお迎えになられるにつけて日本記者クラブの合同記

者会見をされたがその時、

記者――これまでに三回広島へ行かれ、広島市民にお見舞のことばを述べておられますが、戦争終結にあたり原爆投下されたことをどう受け止められましたか。

陛下――この原子爆弾が投下されたことに対して遺憾に思っていますが、こういう戦争中であることですから広島市民に対して気の毒であるが、やむをえないことと思います。

という記者の質問と陛下の御答えがあった。この陛下の御言葉に対して「日本原水協」は「御発言はあれほど悲惨であった原爆被爆者にとっては、大きなショックであり、容認できない」という談話を発表した。「広島県原水禁」「広島県被団協」も同様の談話を発表したのである。何という軽率な見識であろうか。そもそも戦争とは原爆であろうが、通常爆弾であろうが悲惨であり、むごたらしいものなのだ。今大戦のすべてにおいても「遺憾ではあるが、やむをえなかった」のであった。

彼等は「終戦の詔書」を知らないのか。そうであったから陛下は、

戦陣ニ死シ職域ニ殉シ非命ニ斃レタル者及ヒ其ノ遺族ニ想ヲ致セハ五内爲ニ裂ク且

戦傷ヲ負ヒ災禍ヲ蒙リ家業ヲ失ヒタル者ノ厚生ニ至リテハ朕ノ深イ軫念スル所ナリ

と仰せられたのではなかったのか。「五内為ニ裂ク」とは先に述べたように「地獄の業火の中に立ってなお死ぬことのできぬほどの苦しみ」という意味であるが、これほど戦死した者、その遺族のこと、被災者のことに心を痛められたのであった。それとも彼等、すなわち原水協、原水禁、被団協は、その後陛下の御気持が変ったとでも思っているのであろうか。

陛下は毎年八月十五日行われる終戦記念日の戦没者追悼式において、御言葉に「今なお胸の痛むのを覚えます」と仰せられる。これは、単なる御言葉でない。毎年毎年くり返し「胸が痛む」とおっしゃっているのだ。また、戦後の大御歌の中にも

夢さめて旅寝の床に十とせてふ昔思へば胸せまりくる

国のため命ささげし人々のことを思へば胸せまりくる

年あまたへにけるけふものこされしうからおもへばむねせまりくる

国守ると身をきずつけし人びとのうへをしおもふ朝に夕に

樺太に命をすてしたをやめのこころを思へばむねせまりくる

等々あるがあげれば切りはない。今日天皇陛下は詔りを出される習わしが廃止されたが「五内

為ニ裂ク」と詔りされたと同じ内容を今もなお、くり返し御言葉の中で、あるいは御歌の中で仰せつづけられているのである。これほどまでに毎年毎年仰せ下さっている陛下の戦後とは、戦いの庭に倒れた人びとを思い、御心を痛めつづけられた日々であった。これほどの陛下の切ない御気持がわからないという「原水協談話」の軽率な見識だけを責めるだけではならない。すべての日本人が、もう一度己れ自らを責めてみて、この陛下の御心の重みを知らなければならないと思うのである。

陛下の巡幸とは、それは鎮魂の旅であった。二百万人の人びとが戦争で死んだ。九百万人の被災者を出した。何ゆえに歴史は、かくも多くの者を殺すのか。この戦争による死者の魂をどう鎮めればよいのか。陛下は山を越え、野を越えて都市から農村、漁村へと行幸された。そして、戦災者の戸口に行かれ、頭を下げられ励ましの御言葉をかけられた。陛下は泣いておられた。その涙と微笑の中に鎮魂と日本の再建の御祈念があったのである。

長崎で原爆に被爆し倒れた『この子を残して』の著者でもある永井隆博士は、

天皇陛下は巡礼ですね。形に洋服をお召しになっていましても、大勢のおともがいても、陛下のお心は、わらじばきの巡礼、一人寂しいお姿の巡礼だと思いました。

と語っている。陛下の戦後地方巡幸は、巡礼の旅でもあった。

かくして再起した我民族は、今日の繁栄と平和を築くことができたのであった。このことは確実に終戦から今日まで、ひたすら国民のことを思い、国がらを護持せんとの御祈念をいだかれた天皇陛下の御陰なのである。天皇陛下御在位六十年とは、そのことを御祝い申し上げるだけではならない。御苦労は至難であった六十年間、御心を安んじていただく間もなかった陛下に対して、御詫びと御報謝の誠をつくさせていただくものでなければならないのだ。

旅

遠つおやのしろしめしたる大和路の歴史をしのびけふも旅ゆく

昭和六十年の歌会始の御題「旅」の大御歌として詠まれた御歌である。

陛下にとって『大和路』とは、ただ地図の上の大和の中にのみあるのではない。また単なる歴史の中にあるのではない。それは、神々の物語の時代から、妣が国から、常世から、さらには天照大御神が瓊々杵の尊に下し賜わった「三つの神勅」から、聖徳太子や山背大兄王の時代からもつづいているのだ。その『遠つおや』様が『しろしめしたる』日本の国がらをひたすらにお護りになりながら陛下は心の巡礼をなさっているのだろうか。

陛下は今日もなお『歴史をしのび』ながら巡幸をお続けになっているのだ。『けふも旅ゆく』と――。

この天皇陛下と共に存ずる国民ある限り、我日本の美しさは至言であり、永遠なのである。御在位六十年、思いの限りを込めて「天皇陛下万才」を三唱し奉る。

本篇作成上参照した書物は次の通りである。記して謝意とする。

「日本書紀」　黒田勝美校訂　文部省版
「天皇―生命体制」　松永材　今日問題社
「亀井勝一郎全集」　亀井勝一郎　講談社
「斑鳩の塔に雲流れて」　上原和　主婦の友社
「斑鳩の白い道の上に」　上原和　朝日新聞社
「歌人、今上天皇」　夜久正雄　日本教文社
「天皇国日本」　生長の家祭務部
「私たちの天皇」　井上正記　錦正社
「侍従長の回想」　藤田尚徳
「昭和史の天皇」　読売新聞社会部
「みやびと覇権」　葦津珍彦
「終戦秘史」　下村海南　講談社
「秘録、東京裁判」　清瀬一郎　中央公論社
「天皇陛下を讃える」　日本教文社編
「聖断」　半藤一利　文芸春秋社
「皇居を愛する人々」　日本教文社編
「千代田城」　藤樫準二　光文社
「天皇裕仁の昭和史」　河原敏明　文芸春秋社
「宮中見聞録」　木下道雄　新小説社
「裕仁天皇五つの決断」　秦郁彦　講談社
「天皇、その涙と微笑」　読売新聞社会部編
「昭和史の天皇・日本」　日本を守る会編
「日本思想の源流」　小田村寅二郎　日本教文社